

2022 年 1 月 23 日（日）「律法によって律法に死ぬ」

ガラテヤ 2:19-21（その 1）

19 私は神に生きるために、律法によって律法に死にました。私はキリストと共に十字架につけられました。20 生きているのは、もはや私ではありません。キリストが私の内に生きておられるのです。私が今、肉において生きているのは、私を愛し、私のためにご自身を献げられた神の子の真実によるものです。21 私は神の恵みを無駄にはしません。なぜなら、もし義が律法を通して得られるならば、キリストの死は無駄になってしまうからです。

【序論】

2 章の終わりに差し掛かりました。19～21 節と三つの節を朗読しましたが、この中には本書でもとりわけ際立つ聖句が含まれています。特に 20 節は「聖句の中の聖句」と言っても過言ではありません。パウロがどのように信仰に生きていたかが生き生きと語られている箇所です。そして、信仰者の誰もが同様の信仰告白を力強く宣言するものでありたいと願われます。今日は早速この部分を扱いたいところではありますが、いざ学びを進めてまいりますと、19 節だけでもかなり検討しなくてはならない内容が含まれていることが分かってきましたので、今日は 19 節のみとし、20 節以下は次回扱いたいと考えております。私が説教を準備する際に大切にしていることがあるのですが、それは、自分の中で「この箇所はこういう論理展開で文章を構成していこう」と計画を立てたとしても、執筆中に方向転換が求められるときには、それに抗わないようにするということです。聖霊が御言葉を通して自分に自由に働いてくださることを、むしろ楽しむようにしています。今日の箇所も元々は一回で学び切る計画でございましたが、そうはいかなくなってしまうしました。

【本論】

本論 1. 神に生きる／律法に死ぬ

私は神に生きるために、律法によって律法に死にました。私はキリストと共に十字架につけられました。（2:19）

前半のフレーズを読むだけでも難解さを感じるところです。「神に生きる」「律法によって律法に死ぬ」。まず、これらを解明していかなくってはなりません。実は、この二つの

事柄は、よりシンプルに並べることもできるのです。「神に生きる」「律法に死ぬ」だけでもよいのであって、両者は同じコインの表と裏の関係にあります。つまり、神に生きるところでは、人は律法に死んでいるということです。

「神に生きる」とは、神との血の通った関係のうちを生きること、言い換えるならば、神の支配の下に生きることを意味します。更に突っ込んで言えば、聖霊が私たちの内に住み、その働きに導かれ、もう抑えきれない喜びに押し出されて生きていくことです。どうしてそんなに嬉しいのかというと、（ここでコインの裏が開かれるわけですが）自分は神に対して何の良いこともしていないのに、無償で救いに入れていただいたからです。罪の赦しは確定し、永遠のいのちが与えられてしまった。私たちが少しでもマシな人間になったからそのような特権が与えられたのではなく、そのままの姿で神の子とされたのです。私たちが神の子とされるために、神の側で何もしなかったのではありません。それ相応の代価が支払われたのです。神の子イエス・キリストのいのちという、何ものにも代えることのできない「神の宝」がささげられた。それは神の側で用意し、プレゼントとして罪人に与えてくださったものです。

本論 2. 私の体験

これまでも何度かお話しさせていただいたことではありますが、どうしても私自身の体験に基づいてお伝えしなくてはならないと思います。もし私が恵みを知らなければ、恵みを取り次ぐ資格はないからです。私が罪を自覚するようになったのは、およそ9歳の時でした。その頃から、常習化してやめられない悪癖と増大する罪意識によって苦しみ続ける10代を過ごしていました。罪を償いたくても、更にエスカレートし、過去の罪に上塗りするものとなって重みが増すばかりでした。「罪の奴隷」という言葉がそっくりそのまま自分に当てはまっていました。私は、神との関係を壊している自分をよく認識していました。神が望まれないことを行なっている自分が厭で仕方ありませんでした。さりとて、開き直す勇氣もありませんでした。神に対する罪の償いを自分の力でしようとする、ますます泥沼にはまり込んでいきました。見えない法的基準が心に刻まれており、それに逆らって生きている自分を責め立ててきました。「律法」とは、憐れみなく私を責めてくるものでした。律法の役割とは、人の罪を暴くことだからです。今になって言語化できるのですが、私は心に示される神の基準と、その基準からかけ離れた自分との狭間で苦しんでいたのです。

私がこの縄目から解放されたのは、あるクリスチャンの先輩との交わりを通してでした。その先輩が何の遠慮もなく私に放った言葉が私を救ったのです「そういうお前のた

めにイエス様は十字架に架かってくれたんじゃないの？」。あまりにシンプルな伝道メッセージでしたが、この瞬間に長年私の肩に重くのしかかっていた荷が降りたのです。「そうか、もうがんばらなくてよいのだ」「罪の赦しを得るために苦しむ必要はないのだ」「イエス様が自分の罪をことごとく担ってくださったのだ」。岩のように重たかった罪がいきなり全部取り去られてしまい、信じられないような身軽さとともに、全身の細胞までが命に沸き立つ感覚を覚えました。その後、私はこの「罪の赦し」を語らずにはおられなくなり、会う人会う人に伝え続けました。

本論 3. 律法によって律法に死ぬ

ところで、19 節には注意深く読むべきポイントがあります。「神に生きる」「律法に死ぬ」と言われるとき、「律法」に関しては「律法によって律法に死んだ」と念入りな言い方がなされているのです。このことを通してパウロが何を伝えようとしているのかを考えました。考え、学ぶなかで到達していった結論は、パウロが「(自分は) 律法に死んだ」と言うとき、それは彼一人で死んだのではないということです。「キリストと共に」律法に対して死んだのです。どこで死んだのか。十字架の上においてです。律法とは人を罪に定める鋭い剣のようなものですが、それはまさに呪いとなって人を刺し通します。この「聖なる基準」に照らされるとき、人は断罪され、神の御前に生きていることはできないのです。「お前は正しくなんかないぞ」「罪深い者だぞ」と。「そんなこと分かっているよ。じゃあどうすればいいんだよ」。私たちは穴があったら入りたい気持ちで、そのように問い返すほかはありません。そのとき、パウロは十字架を指差すのです。主イエスが架かっている十字架。その十字架上で律法によって裁かれている方がおられる。罪のない方がなぜか裁かれている。しかし、その方は全身に何かを背負っておられる。よく見ると、そこには多くの人の罪が着せられているのです。私たちは「誰かの罪を被る」という言い方をしますが、まさしく主イエスは私たちの罪を被って、身代わりに裁かれたのです。

私は主イエスと一緒に十字架に架けられた強盗とは、(少なくとも一人は) 主イエスと共に裁かれた私の罪を象徴していると言えるのではないかと考えています。彼らは主と共に死んだ。同じように、私の罪もこの場所で裁かれ、「清算済み」という印が押されたのです。そして、死んだ者、罪の償いを完了した者に対して、もはや律法は何の影響も及ぼすことはできません。これが「律法によって律法に死んだ」という言葉の意味でしょう。

本論 4. 十字架につけられたまま

しかも、「私はキリストと共に十字架につけられました」と言うとき、ここで使われている動詞が完了形であることにも注目したい。つまり、私が主と共に十字架につけられている状態というのは現在も尚続いているのであって、一旦起きたこの裁きの出来事が、私が地上の生涯を終える時まで継続していくということです。このことは何を意味するか。私が現在も未来にも犯してしまう罪が処理され続けているということです。言い換えるならば、義とされ続ける状態がいつまでも持続されていくということです。私たちの救いがなぜ取り去られないかの保証は、実はこのところにあるのです。

レビ記において、祭壇の火が消えないように、絶えず燃料を足し続けるよう命じられている箇所があります。

祭壇の火は燃やし続け、消してはならない。祭司は朝ごとに薪をくべて、その上に焼き尽

くすいけにえを並べる。会食のいけにえの脂肪をそれと共に焼いて煙にする。(レビ 6:5)

この「消えることのない火」は、無限に湧き出る人間の罪を燃やし続ける「恵みの火」と言われます。これは、十字架上で私たちが罪に死に続ける出来事の予型と言えるでしょう。確かに、主イエスは十字架上で死なれ、その亡骸は取り下ろされ、墓に葬られました。しかし、主の十字架は「意味」において尚も存続し続けるのです。その意味がいつまで続くかという、私がもはや罪を犯さなくなるまで、つまり地上の生涯を終える時まで、「私の十字架」であり続けるのです。これは私だけのものではなく、信じる人一人びとりが各々に与えられている「主イエスとの個人的な関係における十字架」であります。

【結論】

今日は特に、「律法によって律法に死ぬ」という部分に焦点を当て、私たちの「罪に対する死」「律法に対する死」について考えてまいりました。次回は、信仰のもっと明るい側面、「神に生きる」「キリストが私の内に生きておられる」の方を扱います。さりとて、これらはコインの表と裏であり、深く関連し合っていることを忘れてはなりません。主イエスの十字架において、私たちの罪は裁かれた。その状態は今も尚続いており、主イエスの不断のとりなしの祈り（燃え続ける火）によって、罪の赦しが永続しているのです。この恵みを心に留めて歩んでいきたいと思います。

【祈り】

恵みに富み給う天の父なる神様。ガラテヤ書を通して、私たちの罪は主イエスの十字架上で裁き尽くされたということを、繰り返し学んでおります。しかし、それでも私たちが日々追いかけてくる罪は、赦されているという確信を削ぎ落とそうとします。あなたが御言葉を通して繰り返し語ってくださる罪の赦しのメッセージを聞き続けなくてはなりません。そして、聞くだけで終わることなく、それを信じ、赦された者にふさわしい実を結んでいきたいと願います。そして、その実が一つひとつ自分の人格に生るのを見ることによって、確かにあなたのものとされていることを知っていくという温かな喜びに浸らせてください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
罪と律法の呪縛の下にある人間を贖い、自由への道へと導き給う、父なる神の愛、
我らの罪を担って十字架上で裁かれ、恒久的な赦しをもたらし給うた、主イエス・キリストの恵み、
赦された者の罪を、消えることのない火で燃やし続け給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。